

ヲト灣」(井上禧之助、同誌) 同グレーシア灣(同人、同誌)は前者が大正二年、萬國地質學會議に出席せる時、會議出席者一行と共に視察せるアラスカ地方氷河の地形及峽灣の状態等を序したるものなり。

亞弗利加に就ては、「獨領亞弗利加」The German African Empire(カールト)は獨領亞弗利加植民地、即東亞弗利加、南亞弗利加、カメルーン、トーコー各地の一般地理を記述せるものなり。

大洋洲、南洋方面に關するもの、中、「布哇」(ケロールド)及「進歩せる新西蘭」(New Zealand and its Evolution)は各其地方の地理を説き、主として産業方面を序したるものなり、又「新占領地視察報告」は彙に文部省より南洋新占領地視察の爲派遣せられたる人々の報告を蒐めたるもの、「濠洲事情一般」(金原信泰、地學雜誌)は濠洲の地文人文に關し一般的に序述したるもの、「爪哇の氣候と住民の生活」(石橋五郎、史林)は爪哇の氣候が住民の生活上に及ぼせる各種の影響を記せるものなり。〔下田〕

彙報

●京都帝國大學行幸及天覽品

聖上陛下に於ては、去秋滋賀縣下陸軍大演習御統監の爲め西下あらせられ京都皇宮御駐篋中、十一月十日を以て京都帝國大學に行幸の儀を仰せ出されたり。京都大學の聖駕を迎へ奉るこゝ方に未嘗有の盛儀なり。此日雨籟朝隙に輝き午前九時文科大學陳列館に御、同館内御座所に入御あり、次で圖書館内に於ける陳列品を觀覽あらせられ各擔任教授の説明を聽取し給ひし後、御座所に入御、午前十時四十分を以て行幸あらせられたり。當日天覽品には、鴨綠江澁廻橋模型(二見工科大學教授説明、隈鐵標本(齋藤工科大學教授説明)、天然色寫眞(中澤工科大學教授説明)、赤塚正賢、朝山素心進講事蹟に關する史料(三浦文科大學教授説明)、仿製漢鑑(沂重理科大學教授説明)、地震動様式及阿里山紅椶の年輪(志田理科大學教授説明)等あり。其中、赤塚正賢及朝山素心進講に關する史料及説明を記すれば左の如し。

一、後水尾天皇宸翰

京都市 赤塚政次藏

此宸翰は明曆四年二月九日 後水尾天皇赤塚正賢を召し給うて孟子の進講を問召されし時御感の餘り大學の一句を染て賜はり

しものなり

一、赤塚正賢手書大學億

京都市 要法寺藏

正賢は藤森神社の神主春原氏の出にして明經の備臣伏原賢忠に師事せり此書は明人王道の大學億を賢忠に借りて全部手寫せるものにして正賢の跋あり

一、赤塚正賢手校日本書紀

京都市 鈴鹿義興氏藏

正賢は又頗る我國史を重んじ兒孫を誡めて六國史を始め歴代の雜史を讀ましめたりしが就中日本書紀は其祖とする舍人親王の御編纂に係るを以て時に意を用ひ此書には正賢自ら吉田梵舜の校本を以て校合せしこと跋語に見ゆ

一、赤塚正賢明曆二年同三年日記

京都市 赤塚政次藏

正賢は後水尾大皇に奉仕して御信任を蒙り天皇御讓位の後は上北面に任じ從五位下に叙せられ御落飾の時は又薙髮して名を正隅と改め芸庵と號せり此日記を見るに正賢は學識高く尊皇心に富み常に幕府の專權を憤り名分を重んぜり其中朱子大全を讀んで世の儒士が朱子の佛典を閑せることなしといふの妄を辨じ格物致知の一端としては敢てこれを妨げずといへる一條あり天皇崩御の後致仕す墓は泉涌寺山上にあり

一、朝山素心書狀

京都帝國大學文科大學國史研究保管

此書は承應二年二月二日後光明天皇に召されて中庸を進講せる

朝山素心の筆なり素心は又意林庵と號し九條家の諸大夫たる朝山氏の出にして一昨年御即位の大禮を行はせらるゝに當り勤王を以て正五位を贈られし日乘は其祖父なり素心は朱子學を以て京都に帷を垂れたりしが其名遂に天聽に達して進講の光榮に浴せり此書は其翌日熊本にありたる弟に送りて慶を分てるものにしてこれに據れば素心は初内命を受けて辭退せしも聽されず特に出家の公卿に准じて參内せしめられ小御所に於て進講したりしが關白、左大臣、前攝政以下公卿多く參列したりしが此書にも晴成事可有推量候との一句あり官庫の印ある周易を始め種々の恩賜品ありしと傳へらる此勅召は後光明天皇の愾慮に出てたりしも御父帝後水尾天皇も亦與り聞召せること書中に見ゆ當時朝廷には明經の世儒ありし外、才學の間あるものは微賤の地下、民間の處士をも時々御引見せられしこと此くの如し。其他後水尾、後光明兩帝には處士石川丈山の書を召させ給ひ、後水尾天皇には北村季吟の伊勢物語、土佐日記の註を上らめ給ひしことなごあり。元和假武以降文運の隆盛を來し、につけ此兩朝の親ら範を示して學を奨め給ひし御深意の程深く銘記せざるべからず。

● 贈 位

天皇陛下には、陸軍大演習御統監の爲め、滋賀縣下に行幸あらせ

る、や十一月十七日を以て、縣内並に大演習參加師團管内の功臣先賢の事蹟を追憶あらざれば、贈従一位織田信長を正一位に、井伊直孝を従三位に、以下四十二人に夫れ夫れ贈位の恩命を下し給へり。

●松岡氏舊藏神道書類の購入

吉田家の學頭たりし松岡濯成翁の手澤本近く世に出てだが、京都帝國大學附屬圖書館にては其主なるもの凡百數十種を購入せり、翁の著書として世に知られたるは神道學則あるのみなりしも、購入書にある神代稿一卷も亦自筆稿本なり、其他其口授を筆録せるものに神代卷講義數卷あり、翁は初め垂加の流れを汲み後吉田家に入りし人なるを以て兩派の神道説を研究するに屈強の資料を含み、中には世に出てざりしものあり、和歌に關するものにも自筆本亦頗る多しといふ、記録の中神道學校再興に關する左の記事（原約書あれど略す）の如きは頗る興味あるものなり。

元文二年正月廿六日

一初對顔

二月初日

一今年度神道學校御再興之儀被思召立に付松岡多助尾張雄と云ふ者被召寄學頭に被仰付下總と名を被下御扶持等被下置也

（下略）

松岡多助 時三十八

●京都文科大學に於けるセイス教授の特別講義

京都帝國大學文科大學にては久しく滯洛中なりし英國牛津大學教授セイス博士を聘して、昨年十月一日より、毎週一回特別講義を同大學陳列館内に於て開き、「バロロニヤに於ける古代住民の言語と文字」(Language and script of Early Inhabitant of Baby-lonia)なる題目の下に六回に亘る講演ありしが、熱心なる教授學生等の來聴ありき。同博士は此の講義に對する謝儀を本部同大學に寄附して考古學上の事業に資せんことを申込まれしといふ、因に同博士は瀨田教授の東道にて高野山奈良正倉院等を訪ひしが十二月八日神戸出帆の山城丸にて埃及へ向け出發せり。

●史學研究會

例會 大正六年十月六日午後一時半より文科大學第九教室に於て開僅し左の講演ありたり。

一、鎌倉時代の神道説

文學士、清原貞雄君

神道説の發生は鎌倉時代以後にして主として僧侶其先驅をなし神家儒家之に追從せるもの、如し、其稍深く立ち入れるは天台宗及び日蓮宗のそれなり、山王神道は鎌倉時代の末に成立せり、日蓮宗の法華三十番神は法華守護神説の敷衍せられたるものにて平安朝の末に萌芽を見、戰國時代に大成せり、鎌倉の中葉を代表す

る釋日本紀の神道説は五行説陰陽説を採れるが、卜部神道の先驅として看過す可らず、伊勢神道の本源とされる神道五部書は七朝の末葉より此期の中世頃までに次第に偽作せられたるものにて最も多く佛敎臭味を含み道家の説、陰陽説等の色彩あり、其他外宮神道には神皇寶錄古老口實傳等が當期に出でたるも最も著名なるは度會家行の類聚神祇本源あり、大體五部書の内容を受け結構を周濂溪の通書に採れりと稱せらる、神道簡要亦家行の著たり、又天台神道の類と見るべき僧慈遍の神風和記舊事本紀之義等此期の末のものなり、家行に學統を引けりと見るべき北畠親房の元々集は全然神祇本源に據り神皇正統記には宋學理氣説を應用したる三種神器論あり東家秘傳又其作なり云々、

一、輓近に於ける東洋史學の進歩 文學士 羽田 亨君

此の講演は本號に掲載するところなり
第十回總會 十一月十七日午後零時半より京都帝國大學學生集會場に開催す。當日の講演の如し。

一、平安朝文化に於ける地方的要素

文學士 西田 二郎君

平安朝文化の地方に負ふところを考ふるに、第一京都と地方との間には文化の高下はありと雖、地方に於ても産業的發達、生活の發展ありとは延喜式、御堂闕白記小右記等の記事の比較よりし

て之れを跟つけ得べし、幼稚なる當代の産業狀態は京都と地方との間に於ける差等を大ならしむことなく、却つて地方の發達は畿外の地にある位田の如き遠師の地の庄園の如きも京都の貴紳家の關係によりて剋戟せらるること多く、貨幣制度の不完全其流通の極隘なるは却つて庄園と京都貴紳家との間に庄園的自給の關係に密なるものあらしめたり、播州坂越庄の如きも其好例にして京都の文化生活が地方に負ふこと少からざるなり、第二に平安朝文化の荷擔者として貴族と僧侶とを認むるならば、僧侶が地方的出身なること又貴族間に於ては地方に於ける蹤跡に關する信仰の大なると共に地方出身の驗者、巫覡、醫師の如き一種不思議の力を有するものが却つて地方より入りて貴紳の間に信仰ありしが如きことなど注意すべきものなるべし、尙第三に地理的關係より概観すれば西方地方は東北方地方よりは文化的貢獻の大なるものあり云々、

一、マルクスの資本論に就て 法學博士 河上 肇君

マルクス資本論の出づる前百年アダムスミスは「富」の著書を發表し、各個人の利己的活動の結果に對して無條件の樂觀を齎らす事及んで生産活動は自由放任なることを主張したりしがマルクスは正反對の着眼點より異なる經濟學を設立し資本主義の經濟組織に於ける缺點を力説し、此主義の經濟組織を其儘進むれば

自然に顛覆する時期來るべく、然る後必然的に來るは、社會主義的組織の經濟より主張し、遂に資本論の名著を公にせり、資本論は資本主義の經濟組織に就て研究せしものにして此程の經濟組織は種々の品物を金錢を得る目的の事業の爲に作れる組織なり彼の資本論に説く貨物は勞力さへ惜まざれば何時如何程にても製産し得る貨物に限られ、而も社會に於ては資本なるものが、私有に歸し、勞働者とは互に共同する能はずして自由競争をなせるが斯かる形勢を以て進まば、社會主義となり平均主義ならざるを得ず、而も今日は種々の社會政策の行はれたる結果、社會主義的組織の浸潤漸く加はり來り、實際の現状は彼の豫言に近つきつゝあり云々。

一、二十八宿の傳來を論ず、附分野と十二支の起原

理學博士 新城 新藏君

此の講演は本號に掲載するところなり。

講演終りて庶務會計擔任の報告あり、次で評議員の改選を行ひ今西龍、羽田亨、原勝郎、濱田耕作、富岡謙藏、小川琢治、内藤虎次郎、桑原隲藏、坂口昂、三浦周行、(いろは順)の諸氏當選就任せり。當日講演場には新城博士の講前に關する二十八宿に就ての東西の著書史料を陳列し、同博士は特に詳細なる星圖を頒布せられたり、終つて有志晩餐會を開き午後九時散會せり。

●讀史會

例會 大正六年十月五日午後六時より、新入學生の歡迎を兼ね開會、來會者、喜田博士、西田講師、清原、魚澄、中村三文學士、座田氏、古田、牧、富森、鈴木及び新入學生長谷、六人部君缺席、橋川の諸君なり、席上左の講演ありて十時散會せり、

松下見林に就きて

古田 真一君

松下見林は、當時の學者の支那の史籍に明かなるに拘らず我が國のそれに暗きを慨し、一方にては古書を刊行し一方にては自ら國史の研究をなせり、刊行書の中に三代實錄、古語拾遺沈く行はる、國史研究に關して最も有名なるは異稱日本傳とす、而して國史の研究に外國史籍の必要を認めたるは史學史上彼の名を不朽ならしむる所以なり、但し見林が我國史を主として之に徴し取捨せんとしたる研究法は尙不充分なりといふべく、それがため見林の説にも誤あるを免れず。本書一度出で、より類本續出せり、見林が勤王の志深かりしは前王幽陵庵の序に明らかなり云々。

右の講演について喜田博士は異稱日本傳に「南倭北倭屬_レ燕」の句を山海經より引用し、新井白石以下皆此説に従へるも、見林以前既に下部氏の釋日本紀に見い、同書は更に延喜の學者矢田部公望の私記に基づけり、文政の頃薩藩の學者白尾國柱は髭藩名勝考に於て「蓋國在_二鉅燕_一南、倭、北_二倭屬_レ燕_一」の句を引き、此讀方は水

戸彰考館の發見にして、白尾兵は屋代弘賢より聞けりとの記せり、而も其後の學者、多く本書に遡らず舊によりて「南倭北倭」の句を異稱日本傳より取りて憚らず、更に古ノ類聚の誤を重ねたり云々といはれたり。

石器金屬器並用時代に就て

喜田博士

北史隋書中の琉球が臺灣なりとの略定説となれるが如きも余は速に贊し難し。最近藤田豊八氏は史學雜誌に於て元史の「波羅公」は今の琉球なりとの説をなせるが、北史隋書に琉球王の都を「波羅檀洞」と記するもの亦一證とすべきか、當時琉球は石器金屬器並用時代にして刀劍はあれども國に鐵少きが故に角骨を以て之を補ひ、農大は農耕に石鍬を用ゐたり、石鍬と稱しべき石器は我國にも往々發見せらる、蓋し金屬は貴重にして一般の使用に至らざりしなり、我が彌生式土器を出だす遺蹟には此時代に屬するもの少なからざるが如し云々。

例會 十月二十九日午後六時より學生集會場に開く、來會者三浦喜田兩博士西田講師 清原、魚澄、中村三學士、座田氏、古田、牧、辰馬、宮森、鈴木、桑原、長谷、橋川、梅原の諸君席上左の講演あり、十時半散會す

三寶院文書に就て

中村文學士

醍醐三寶院後七日御修法に關する文書の種類に一差文或は内狀

(前)十二月中旬諸事より、御修法執行の僧侶選定其他諸準備をなすべきを命ずるものなり、攝關家の御教書を以てするときは之内狀と呼ぶ) 二繪旨、正月四日頃に出づ、此時代の繪旨に就て注意すべきは繪旨と禮紙と續けて巻くこと包紙の折方に嚴密なる形式あること、及び繪旨と御教書と用紙の混亂せることなり、時には繪旨が白紙若くは杉原にて書かれ包紙なきものあり、三請々、繪旨に對し寺務職より差出す書狀、四請定、御修法執行に關して僧侶に出席を命ずる文書、五請狀、出席を命ぜられし僧侶より寺務職に對して承知の旨を答ふる文書、六卷數の届出あり、要するに社會秩序の整頓せると共に文書に於ても其形式整頓し來り、これを以て威嚴を添へんとして、却つて威嚴を損じたるの感なくんばあらず云々。

朝鮮の神話傳説に就て

三浦博士

朝鮮には檀君及箕子の神話傳説あり、平壤には箕子の祠堂、宮址外城及井田址等あり、就中井田址は最も有名なるも、記録と位地とより推せば井田にあらずして街衢の跡なるべし、而して檀君には檀君祠あるのみ、抑檀君の神話は檀君古記に記す處ながら三國史記には見えずして、これより約百五十年後に成れる三國遺事に現はるれば略此の神話の成立年代を推測すべし、朝鮮は南北に於て氣候風土自ら異なるものあれば半島の原住民もと南北に

別れて異りたる文化を有せるもの、如く、古墳及其副葬品の相違はこれを證す。而して檀君と箕子の傳説は共に支那文化の影響を受くること最も多き北朝鮮の産物なり、南朝鮮の傳説には北方のそれの如く代表的の神なしと雖も、地方毎に夫々神話を有するなり彼の高句麗東明王は檀君の後裔なりと稱せられ、高麗は高句麗の後を承くると稱せらるゝが如きは檀君傳説が高麗時代に成立せしことを證するにはあらざるが。次に箕子は支那文化を輸入して朝鮮の開發を促進せし人として崇敬せらるゝも、此傳説は支那文化の影響を交けて朝鮮の文化が餘程進みし後に、北方に移住せし支那人間に成立せしものなるべく、却て檀君傳説に先つべし。檀君傳説成立の動機は朝鮮の自尊心より支那隸屬的傳説に對する反抗にあるべし云々。

例會 十一月二十六日午後六時より學生集會場に開く。來會者三浦博士、西田講師、清原、魚澄、中村三學士、座田氏、古田、下川、牧、辰馬、富森、鈴木、桑原、長谷、橋川、岩橋、梅原の諸君、席上左の講演ありて後大會開催に關する協議をなして十時十分散會。

徳川時代に於ける朝鮮信使聘禮

桑原君

朝鮮信使の聘禮は巨額の國帑を費し諸侯人民を苦ましめ弊害甚からずして、寧ろ我國外交の失敗たりしも家康以來對內的政策のた

めに優遇せり。宗氏の處置は我國の屈辱に歸するもの多かりしも亦兩國の隣交を圓満ならしめたる功は之を認めざるべからず云々

丹後熊野郡久美濱の丸木舟に就て

辰馬君

原始的時代の河川の交通機關並漁具として舟が早く用ゐられその構造が始め一本の大木をくり抜きたる所謂丸木舟なりことば東、西共海的事實なり、其制の今日迄比較的によく殘存せられたる地方も尠からず、丹後久美濱に現今使用せらるゝ丸木舟は即ち其の一なりとて繪圖及寫眞をばし、こは長さ十七尺内外にして總て六本の木を以造り甚だ古より傳れるもの、加し、此の丸木舟に類似するものには出雲の「そり」此舟熊野の「もろた」舟あり、前者は「丸木舟」に比すれば艀部高く上り、舟の中央部に僅に狭き座席を設けある等原始的の構造を留む云々、

賀茂社精進頭に就て

座田君

賀茂の別雷神社に奉仕する社司以外に精進頭なる職掌あり、其の起源は寛仁二年に賀茂上下兩社に愛宕郡八箇郷を寄進せられたる時にしてそこより毎年正月に神饌を献備する御棚會神事に興るために置かるさいはるれども記録に見ゆめしは元久元年にして、賀茂氏人中十歳以下三歳以上の男子を五組に分ち年毎に各組より一人の頭人を出せり、後には専ら加持祈禱を掌ること他社の御師に比すべきものとなれり、これは戰國以後社領を失うて生活の困

難を感ぜし爲めならん、賀茂にも御師なきにあらざりしも構進頭ありしたる發達せざりき云々、

第八回創立記念大會 十二月一日午後零時半より、第八回創立記念大會を學生集會場に公開し晝夜に亘りて講演及史料展覽を行へり、先づ長谷勝利君本會の成立、事業等を述べて開會の辭となし次に鈴木登君は慶安の變の意義について、徳川幕府が諸侯の強大を抑へて幕威の徹底を計りし結果浪人の増加と彼等の生活の窮迫を來し、こゝより家光の時武術を奨勵せし事と、鳥原の亂とは殺伐の氣風を復活せしめ、又將軍一族の嫉視、後光明院の御英明、執政の不人望の事等交々浪人の反撥を切共し、正雪の變を生ぜるを説き、これが勸諭となりて幕府は浪人に對して從來の消極的壓迫策の外、積極的浪人減少策を採り、末期養子の弊を弛め、除封の數を減じ就職仕官を誘導したれば慶安以後は浪人の數以前の十六分一に減せりとなし、

富森大梁君は日蓮上人の觀たる惡心僧都について日蓮上人が「往生要集」に基ける念佛家は口を極めて攻讐しながら、惡心僧都に對する攻撃の爾く甚だしからざりしは上人が彼の「往生要集」を以て釋尊四十年の假の説法に擬し、其後の著「乘要訣」を以て釋尊の眞の教たる法華教に擬したる故なりとて鎌倉時代新興の淨土日蓮二宗が源を惡心僧都に發するものと見るべきを論じ、牧健二君

は武士の起源に就て我國軍團の謂は武器兵糧自辨の不便、國司軍糧等の兵士私用及び兵士の柔弱等の諸原因より延暦の頃に至りて崩壞し、健士選士健兒傭兵之れに代れるが、就中弓馬に堪ふる雜色淨宍淨浪人等よりなる傭兵を採用したると大に注意すべしとなし主將が率ゆる家人を土地に使役したるとは家人と土地との關係を發生し、所謂家人制度の成立を見るに至りしが如しと論じ、文學士中村直勝君は、裡供御人について、主として新に發見せられたる滋賀縣伊香郡菅浦の古文書に基き其裡裡供御人となりし徑路を尋れ、始め大浦庄の配下なりしものが後其支配を脱せんが爲に叡山檀那院を本所とせるより兩地間境界の紛争絶えず菅浦は更に日吉二宮及び梶井宮を領主と仰ぎ且竹生島西園寺等も關係を結び五重の保護を以て守護地頭及び大浦の壓迫に備へ建長年間には遂に朝廷内藏寮と關係を結び其供御人と稱し、年々狸大小豆麥等を進獻する事となれりと説き、文學士風澤惣五郎氏は中世に於ける兵庫港について、先づ坤圖に就きて湊川河床の變遷を説明し從來の説を擧げて古來明治三十一年の河床變更迄は四等變遷なかりしと斷じ、古の大輪田泊は今日の兵庫港よりも廣き地域に亘りしが如く仁壽三年以來此の泊の修築絶はざりしも、其最も著しかりし平清盛の事業より建久七年東大寺僧長元の築港、經ヶ島料米と東大寺との關係細川勝元の築港等に説き及ぼし、最後に兵庫

の海關は其收入最多く、南北ニテ所に在りて北の關は東大寺、南の關は興福寺の所管なりし事を述べられたり、十分間の休憩後更に開會、文學士西田直二郎は盈滿と施典とに就て、平安朝時代に盈滿を恐るゝ思想ありて其淵源は時代生活に發する所にして又文化を考察する上に必要なりとし盈滿に過ぐるを戒心せること竹取物語、後撰集等に表はるゝ所より見、又菅原道真、藤原道長、平重成の行爲に就いての文獻を引きて説明し、當時盈滿を避くる方法には出家と施典との二方法ありしと其實行を見たりしは、之を個人的に考ふれば盈滿を避けんとする「徳」にして、之を社會的に考ふれば「貴族と庶民との接觸」なるが故に此時代の庶民階級を研究する上に輕忽に附すべからざるものなりと結ぶる。最後に文學博士三浦周行君は文藝復興期の儒風について、講演せられしが、本誌研究欄に同博士の論文を掲載したるを以て更に記さず、これにて畫の部を終り、午後七時夜の部開會、栗野孝稔君は戰國時代の伊達氏について、政宗以下輝宗頃までの伊達氏が公家と親交あり又豊富なる財力を利用して自家は勿論領内にも文藝の盛となりしこと、及伊達氏の法令として有名なる腰笈集が他の武家の法制に比して精細なることを述べ、文學士清原真雄氏は垂加神道について、山崎闇齋の晩年に至り神道家となりて其末子學の基礎の上に伊勢神道及吉田神道を加味したる儒學神道を大成せる徑路を依

き其内容貧弱なるにもせよ、尊皇論の勃興に深き關係を有し、又水戸派の學說に大なる影響を與へたることは注意すべしと論じ、文學博士喜田貞吉君は蝦夷名義考と稱しアイヌを「エミシ」と云ふ事に就きて、故井博士はアイヌ語の「エムシ」(刀劍の意)の轉訛ならんといひ、新村博士は「エミシ」(弓師)の轉ならん説かれしも、別に一説を提すべしとて、元來エビス(又はエミシ)はアイヌを呼ぶ名稱なるも、「エビス」とは古くより日本人が汎く他の異種族を呼ぶ語にして、アイヌをば「佐伯」といへり、と述べ、彼等の自稱としては天書に「カイ」といふと見ゆ、又松浦武四郎が十勝アイヌの老人より聞きし彼等自らをも「カイナ」女を「カイナチ」といひしを、シャモ(日本人のイタコ(言葉)に慣れてアイヌと云ふ様になれり)の説を擧げ、アイヌ自身に「カイ」と稱したるが故に漢字のカイの首を有する蝦夷の字を當てしなるべく、支那の書に樺太住民のことを苦夷、苦兀又は屮葉とあり、今もギリヤーク、オロツコ等はアイヌを「クイ」と云ふが、「クシ」と「クイ」とは相轉すれば「クイ」は即ち「カイ」の轉なるべく、「クイ」に「ナ」を附くれば「クイナ」となり、「クイナ」が「アイヌ」に轉訛せしならんといはれ、文學博士内田銀藏君は桂草堂隨筆を讀むと題して、此書が廣瀬旭莊の隨筆にして、百家隨筆第一冊に收めて出版せられたることより、編纂の年代、筆者、書名の起り内容の一般を述べ、

其中卷には彼自らの經歷思想行等に就きて偽らざる告白ありて興味多く且つ教訓なるもの尠からずとて、廣瀬家が長壽の家なること、田莊が父五十七歳の晩年の子なること、祖父、父共に立派なる人格を有せること、淡窓と田莊と兄弟の性格を異にせしこと、田莊が詩に長ずること同時に實學に努めたること及其三部比較論等を紹介せられたり。斯くて桑原親運君の閉會の辭よりて散會せしは午後十時十分なりき、當日の陳列品は第一部赤塚正賢の遺蹟に關する史料には濠に、天覽に供せられしもの、外後水尾天皇宸翰三文字刻本、正塚目筆祝詞、同人口宣案、同墓碑拓本、赤塚系圖あり。第二部朝山素心の進講事項に關する史料には同じく、天覽に供せられしもの、外、素心墓碑拓本、朝山系圖、朝山氏文書あり、第三部禁裡供御人關係文書には濠賀縣管浦文書及び國史研究室の出納文書、攝津今宮の御人所置文あり、第四部垂加神道資料には主として京都帝國大學圖書館藏の松岡氏舊藏神道書類より選擇せる山崎闇齋を始め其門人等の重なる著書あり、第五部慶長年間耶穌教徒の墓碑には濠に市内延福寺境内より現はれし慶長十三年以降の同信者の墓碑(實物)三基と最近に成願寺境内にて發見せられたる同十四年の墓碑拓本あり、陳列品には各其説明書を附し、別に陳列品中の赤塚去庵等寸長日記(明曆三年五月二十六日の條)乾元元年近江國竹島繪圖及慶長十三年耶穌教

信者墓碑を記念繪真書として頒てり、是日來り會するもの田邊、坂口、新村、野上諸教授等無慮二百數十名、會員には宇治山田市よりせる今村學士、大阪市よりせる菊池學士、福井市よりせる牧野信之助氏等あり、例に依つて記念攝影の後和氣霽々の裡に晚餐を共にせり。

支那學會

例會 大正六年十月十三日午後六時より文科大學第九教室に開會す、來會者内藤、桑原、高瀬諸教授羽田助教、富岡、喜田諸講師、其他會員三十餘名、左の講演あり、十時閉會せり。

一、章炳麟の政治說、支那學士 岡崎 文夫君

章氏の政治說は民族的革命主義に始り、これを潤色するに北來の共和說を以てす。後公羊派の根據を覆へすことより、一轉老子に入り、再佛敎に入り、民生主義を唱へ、支那の民族性に歴史的な研究を加へかくて所謂師傅の政治を高唱せるものなれば、始め感懐に訴へしもの後に理智を以て總括するに至り、活動的生氣溢るる形式の裡に固執し去れる傾あり云々。

一、支那將來の十鐘に就て、内藤 教授

從來他國の目的を以て主として行はれたる銅器研究が宋代に至りて考古學研究となり、清朝に入りて嘉慶道光の間其の全盛に達し、陳介祺、潘祖蔭、吳式芬より吳大澂吳雲の徒を輩出したるが後復

漸く甚へたり此に陳列せる鐘は陳氏の舊藏に係り、これを見て吾人は周の厲、宣の間に最も多く製造せらるし金器が、其の銘文に於て主として詩經の文に似たるを知り、且つ其の製造されたる地方的特色をも發見することを得るなり云々、(會場には陳氏舊藏の十鐘を陳列し一々説明せられたり)

大會 十二月二日午前九時より京都帝國大學々生集會場にて第四回大會を開く、會する者、狩野、桑原、高瀬諸教授羽田助教、西村、富岡諸講師以下會員四十餘名、荒木總長仁保博士其他奈良大阪東京方面より名士の來會するあり無慮百五十名に達す、

文學士佐藤廣治氏は鄭玄の集大成に就きて彼の集大成の根本觀念は其の著六藝論に於て窺ひ得べく、彼の六藝論は彼の孔子集大成觀なりとして六藝の起原及詩書易禮春秋の各論に亘り、更に此等を總會する孝經の性質を説き、彼が懷抱したる孔子集大成觀を立脚點として樹立したる鄭學の性質に及び、文學士那波利貞氏は白馬寺に就て、其の疑問を開陳し、支那へ佛教の渡來したるは必ずしも明帝の迎佛使節派遣に起らざるべく、前漢の時既に渡來しあり、且つ間行し來りし外國僧もありしなるべしと説き、白馬寺の名稱の起りしは三國以來のものなるべく、白馬寺の禪子が北魏時代に一際目立ちて外國的色彩ありしことを詳説し、文學博士桑原隲藏氏は支那の法律と家族制度に就て、他國のそれに比し大に異なる由

を述べ、唐律を基とせる支那法律の家族の長上を犯す者を以て嚴罰に處し罪と罰とは其の地位關係によりて相等しからざるを例證し結ぶに其の近代法律との調和の困難なる所以を以てせられたり時に午後零時二十分即ち會員並に有志者の會食あり、午後一時半より再開、文學士寺木正兒氏は銅脉先生の狂詩に就て、銅脉の傳及其狂詩集たる太平樂府太平遺響等を紹介し、彼が巧みに社會の裏面を描くの才を示し、且つ卑俗に陥らざるは多少學問の根底ある者認め、最後に明和安永時代の狂詩の大家、江戸の蜀山人大坂の天所先生とを比較して、銅脉の勝れる所以を述べたり、此間狩野博士は陳列品の説明としてペリオ、スタイン兩氏發掘の由來と其の結果とを紹介せられ、富岡謙藏氏の説明あり、終つて文學博士高瀬武次郎氏は來知徳の易説について、日本に於てこれを信奉せる易學者根本通明氏の事を述べ、次で來氏の易説が義理を輕んじ象卦に重を置ける事及び其の錯綜中爻の諸説に就きて詳説せられ、文學士武内義雄氏は莊子に就て、現行の莊子の錯簡脱誤多きを述べ、京都高山寺の古寫本、敦煌出土本、淮南子呂氏春秋等を研究せし結果、内七篇にも寫入の個所ありと云ふ論語の下論に考莊思想の見ゆるを説明し、最後に文學士松本文三郎氏は支那の石經に就て其儒道佛の三種類ありとて、儒に於ては後漢の熹平石經より清の乾隆五十八年に建てられたる十三經に至る迄の各代

の石經について、道に於ては唐代に易州に建てられたる老子黃帝經及富岡謙誠氏所藏唐の景龍中に建てられたる老子石刻の拓本について、佛にては主として房山石經について詳述せられたり、當日陳列品の主なるものは敦煌出土耶穌教一神論卷三殘卷厚本以下佛國ヘリオ氏所得敦煌唐寫本影片二百四十九枚なり、

●豊公記念展覽會と同講演會

大阪市高麗橋三越吳服店にては其新築工事の竣工を機として昨年十月三日より十四日迄大阪に因める豊公記念展覽會を開催し況く豊臣時代の古文書記録其他の遺物を蒐集して展覽に供せしが、京都帝國大學を始め各地所藏家の珍什にして從來未だ世に出でざりしもの多數に上り、十三日は又記念講演會を催し、渡邊龍亭氏(豊公の成金振)及び三浦博士(豊公の其時代)の講演ありき、陳列品中秀吉自筆の書狀には京都文科大學山縣公爵上野理一氏等所藏のものありしが、其内山縣公爵上野理一氏等所藏の八月三日の書狀は名護屋よりおれ、(夫人淺野氏)に宛てしものにして朝鮮に於ける工事も竣り兵站も整へたれば來月二十五六日頃大阪に歸還すべきを告げたるものにして、文祿二年のものと察せらる、然るに恰も同日秀吉の庶子拾千生れしを以て八日秀吉は更におれ、に書を興へて凱陣を急ぐべきを告げたるもの現に高臺寺に存し、是月二十五日大阪に歸れるなり、秀吉の所用と傳ふる衣裝器物其他拜領

品と辨するもの頗る多がりし中に、真恩寺所藏の秀吉手取笠一個备用鎖及環一組等は秀吉の謝狀(朱印)を添へ釜を納めし箱には桐紋をあらはし當時の遺物として最も正確なるものなり、同書よりは尚ほ秀吉遺愛の三面大黒大厨子入一軀、法華經一卷添をも出陳せり、

●第三回大藏會

京都佛教各宗聯合會の主催に係る第三回大藏會陳列會は昨年十一月四日京都市寺町四條下大雲院内高等家政女學校に於て開催せられたりしが、出品點數四百十一點に及び、外にスタイン氏蒐集燧燧出土古寫佛典のロートグラフ二百二十八張を出陳され前回に譲らざる希觀の逸品尠からず、當日は矢吹慶雄師スタイン氏の敦煌出土の古寫經に就て並に(歐米の佛教)及び松本博士(支那の所感)の講演ありたり。

●名古屋史談會

大正六年九月二十三日より十月六日迄愛知縣商品陳列館に於て、新古陶磁器展覽會を開催せり、本縣は古來窯業の盛なる地たるにも拘はらず從來此種の企なく且つ舊家の藏品は容易に外見を得ざる土地柄として本會の此舉を發表するや頗る時宜に投じ名家傳家の珍藏品の出品千有餘點に及び、來觀者相踵ぎ爲めに閉會期日を二日間延期せり、此會は例年之を開かんことを期し今回は最初の試

會報

みとして總論的に陳列するを主としたれば、彌生式土器、祝部土器、埴輪、碑、朝鮮土器、古瓦等より陶磁器を各圖別に陳列して簡單なる説明書を附せり、會期中九月三十日午後六時より同館に於て講演會を開き、工業試験場長小泉角五郎氏（陶磁器の分類に就いて）、東京帝室博物館高橋健自氏（上古の燒物に就いて）、文學士奥田誠一氏（陶磁器の鑑賞に就て）の講演あり、高橋氏は一々實物を示し彌生式土器は土蜘蛛の造りし物なるが、後に土師部となりて埴輪を造り、朝鮮より陶器製法の傳はれるに至りて併せて陶器をも造りしならんとの新説の發表ありたり、午後十時過限せり、

聽講者百餘名又會期中繪葉書三組（土器埴輪、碑、古瓦一組、藤四郎以下縣下の名品一組、一般各地の名作數種一組）を會員並に一般特志家に配布し、出品中の優秀なるものは百五十點を寫真帳とし古陶集と名けて出版せり、十一月三日午後六時より名古屋市會議事堂に於て開會、柴田常惠氏は「考古學の一斑」と題し東西に於ける考古學の沿革を述べ、林圀之輔氏は「梵語に就て」と題し、歐羅巴印度語と梵語との差異悉藝學者の所説の誤れること並にサンスクリットの一斑に就いて説明あり、出席會員四十餘名にて午後九時三十分閉會、同月十二日徳川侯爵邸に就て傳來の能裝束の圖列を參觀せり、（幹事尾佐竹彥報）

史林編纂會 昨年十二月三日午後零時半より文科大學陳列館に開催、三浦濱田兩評議員以下西田、中村、植村、下田、那波の各編纂委員出席す、同月七日午前十一時より同所にて開催各委員出席せり。

編纂餘言 本號には登載すべき原稿囑轉し、早く到着したるものにして紙數の關係上、之れを次號に譲るの止むなきに至りしものあるは編纂委員一同の遺憾とする所にして、切に玉稿を寄せられたる諸彦の寛恕を叫ぐ所なり。又批評欄も同一の事情に依りて本號にはこれを割愛せり、尙紹介欄は昨年例に倣ひ『昨年の史學地理學界』の記事に譲りて本號にはこれを廢せり。

入會

- 淺野長武
- 李範昇
- 今關壽磨
- 江見清源
- 上林敬次郎
- 古藤田喜晴
- 竹内榮助
- 東京市本郷區彌生町三
- 京都市上京區吉田町中大路二
- 朝鮮京城倭城臺官舍
- 三重縣宇治山田市
- 朝鮮忠清南道公州
- 東京市神田區稻泉町一番地十六
- 朝鮮龍山軍司令部

東京市四谷區荒木町七

東京市小石川區原町二二〇

朝鮮釜山中學校

朝鮮忠清南道公州地方法院

大阪府南河內郡古市町

仙臺第二高等學校

京都市岡崎町入江五一

同市北野神社

南樺洲鐵 株式會社

(以上紹介者 三浦周行)

福井縣福井中學校

(右紹介者 牧野信之助)

德島市富田浦町熾町二丁目

(右紹介者 田所市太)

朝鮮龍山普通學校

(右紹介者 加 觀覺)

滋賀縣膳所中學校

(右紹介者 中村直勝)

京都文科大學史學科

(右紹介者 植村清之助)

京都醫科大學醫學教室

(右紹介者 梅原末治)

長沼賢海

花見朔巳

平山正

平山勘次

森田博三

岡澤鉦治

杉村勇次郎

山田新一郎

上田恭輔

本山久平

岡本直衛

矢野國太郎

長尾景治

長谷勝利

今井楢三